

鹿児島県の捕鯨

不破 茂,^{1*} 米原正晃²

Whaling in Kagoshima Prefecture, Japan

Shigeru Fuwa^{1*} and Masaaki Yonehara²

Key words ; Whaling, Kataura, Kunezu, Oshikiami, Whaling base

Abstract

Whaling activity in 2 areas was investigated for 3 periods from the viewpoint of fishing technology. Whaling activity in Kataura, which is located southwest of the Satsuma peninsula, was investigated for 25 years from 1888 to 1914 using an ancient type of set net. Kunezu, which is located at southwest of Amami Island, was investigated for 3 periods using modern whaling technology.

Whaling in Kataura was conducted using ooshiki-ami, an ancient type of set net. The catch mainly consisted of blue fin tunas and yellowtails, and whales were only caught sometimes. During the course of a year up to 10 whales were caught. Many aspects of whaling technique were believed to be influenced by the traditional whaling method. Only the inhabitants of the neighboring village of Kataura cut the captured whales; they performed a unique ceremony before carving the whale. These activities were influenced by the whaling technology employed in Arikawa in Nagasaki Prefecture.

Whaling in Kunezu, Amami Island, was initiated by a whaling company in 1911 and was continued till 1923. During this period, the number of cetaceans caught decreased each year. Of the 6 types of whales that were caught the number of Humpback whale (*Megaptera novaeangliae*) captured was the greatest among them. The capture location of the whale was very close to the coast except that of Sperm whale (*Physeter macrocephalus*). Small scale whaling was conducted again, and a small number of whale was sporadically caught in the following 5 years 1934, 1935, 1957, 1958 and 1961. The whaling station has been closed since 1962.

Due to the whaling activities in both areas, a large number of cetaceans were caught during their seasonal migration; therefore they became extinct in a few number of years. This extinction is believed to be due to the modern whaling techniques that were developed during the years that resulted in the capture of many cetaceans in the northern sea.

鹿児島県では明治中期から大正中期にかけて西加世田村片浦（現南さつま市笠沙町片浦）と奄美大島の東方村久根津（現瀬戸内町久根津）において組織的な捕鯨が行われ、瀬戸内町久根津では昭和30年代にも散発的だが捕鯨が行われた。本研究ではこれらの捕鯨の概要を明らかにして、二つの地域で行われた捕鯨を漁業技術の観点

から検討するとともに、捕鯨がそれぞれの地域で果たした役割を明らかにすることを目的としている。

材料及び方法

鹿児島県西加世田村片浦（現南さつま市笠沙町片浦, Fig.1）と奄美大島の東方村久根津（現瀬戸内町久根津,

1: 鹿児島大学水産学部漁業工学分野（Fisheries Engineering, Faculty of Fisheries, Kagoshima University, 4-50-20 Shimoarata, Kagoshima, 890-0056, Japan）

2: 鹿児島民俗学会（The Folk Society of Kagoshima, 738-6 Shimofukumoto, Kagoshima, 891-0144, Japan）

*: Corresponding author, E mail: fuwa@fish.kagoshima-u.ac.jp

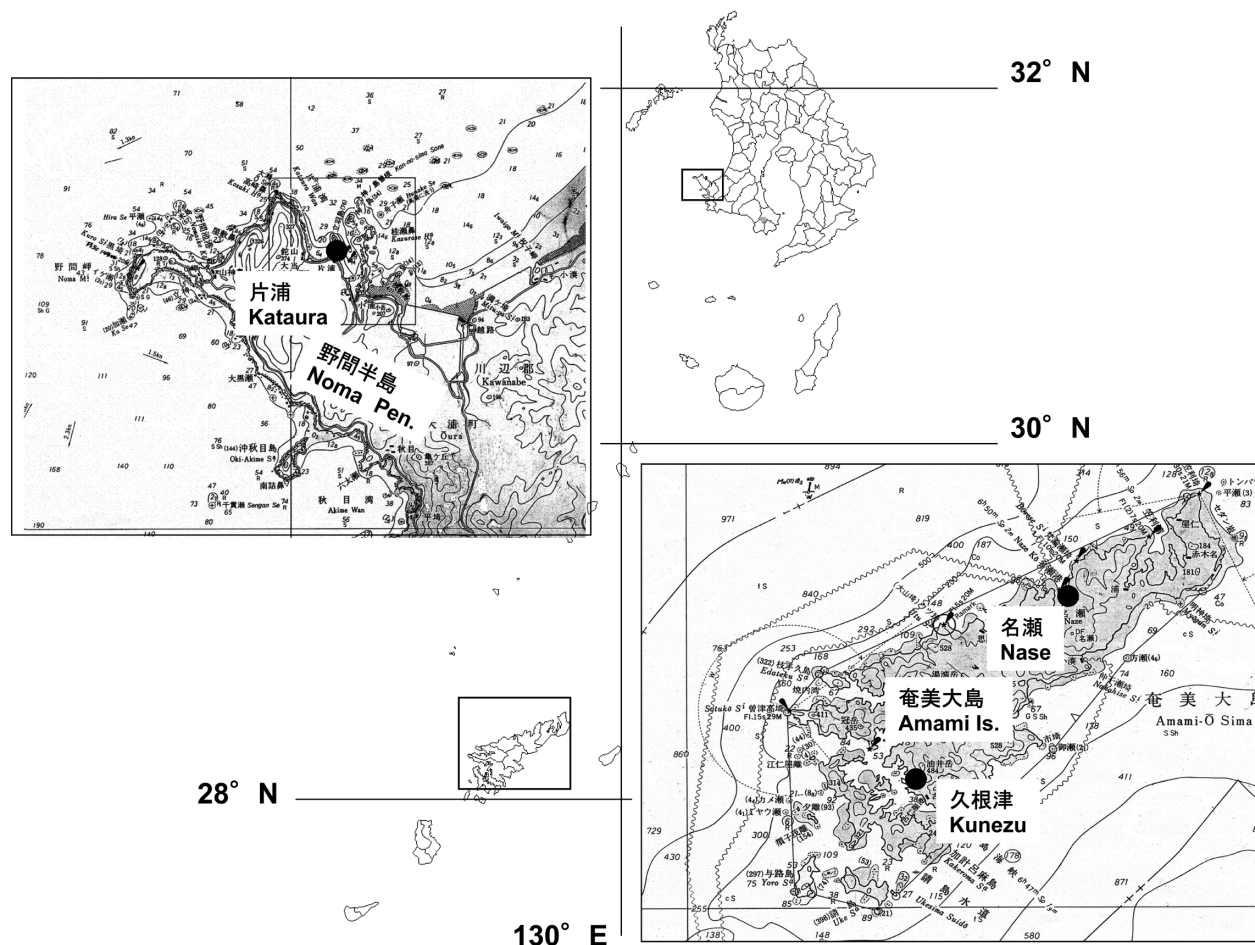


Fig.1. Maps showing the two whaling stations of Kataura in Satsuma peninsula and Kunezu in Amami island., Kagoshima Prefecture.
図 1. 鹿児島県の捕鯨基地、薩摩半島の片浦と奄美大島の久根津。

Fig.1) の捕鯨について、文献調査を行う共に、現地での実地調査並びに関係者からの聞き取りを行った。

南さつま市笠沙町片浦で行われた捕鯨については、郷土資料から捕鯨関連の記載を調査した。また、昭和 10 年代から約 50 年間定置網に従事した方から聞き取りを行い、片浦地区と近隣地区の寺院で鯨供養の有無を調査した。

瀬戸内町久根津で行われた捕鯨については、鹿児島県立図書館奄美分館、及び瀬戸内町資料館で郷土資料を対象に、久根津で行われた捕鯨関連の記載を調査した。ここでは昭和 30 年代に行われた捕鯨について、解体作業に従事した方から聞き取りを行い、久根津に現存する捕鯨関係の施設などを調査した。

結果

片浦は薩摩半島南西部の野間半島の基部にあり、定置網漁業が盛んな集落である (Fig.2)。ここには薩摩藩時代の 1847 年 (弘化 4 年) には片浦に鮪 (しび) 網が 5 帖、鰯網が 3 帖あり、鮪網は 3 月から 6 月まで敷入れ

て、鯨まで獲ることがあると記されている。¹⁾ 明治中期の片浦は鰹、鰯、鯨の漁獲物と鰹節、鮪節、塩鰯、塩鯨の加工製造物が断然多く、鯨の生産は片浦の特徴でもある。²⁾ ここでは 1888 年 (明治 20 年) から 1914 年 (大正 3 年) までの約 25 年にわたってクジラの捕獲記録がある。以後これを笠沙捕鯨と呼ぶ。記録によれば、鯨種は定かでないが年間に数頭から 10 頭程度のクジラが捕獲され、塩鯨として肥前、肥後に出荷しているが、一部は生鯨として鹿児島市へ出荷している。笠沙捕鯨の生産を Table 1 に掲げている。南薩地区の漁季表³⁾によれば、4 月から 6 月に大敷網で漁獲され、彼岸のころに岸近くに来遊することから「彼岸鯨」³⁾と呼ばれ、それらは主としてナガスクジラ (*Balaenoptera physalus*) とザトウクジラ (*Megaptera novaeangliae*) だった。³⁾ 笠沙捕鯨について次のように記されている。³⁾ 『笠沙地区の大当と高崎山の間にしかけられていたマエアミ、ナカマミと呼ばれる定置網に掛かることが多かった。①ヤマミによる鯨の発見、漁船の出漁 ②コシ網によって包囲し、クジラ

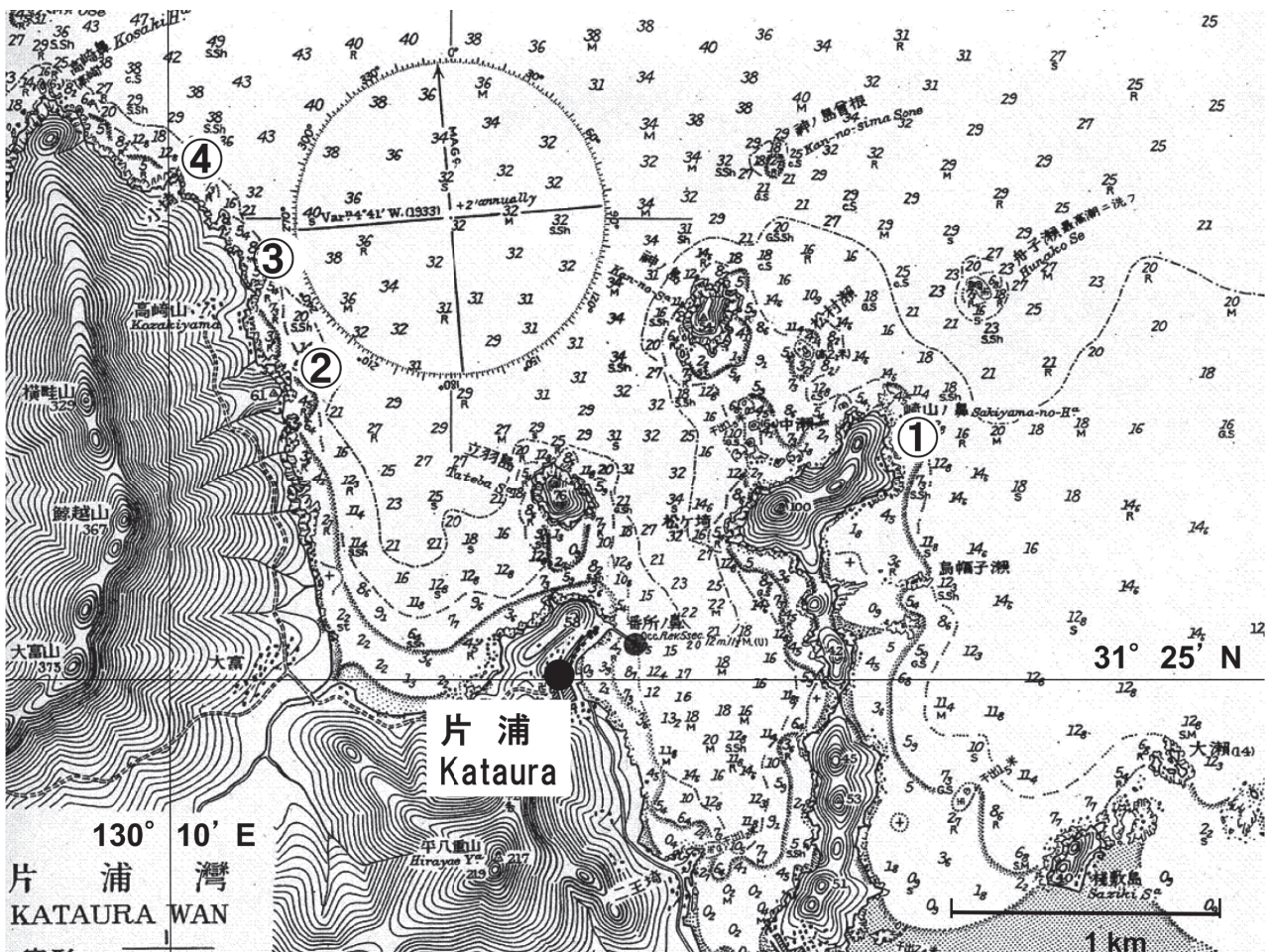


Fig.2. Locations of set net (Ooshiki-ami) adapted for whaling in Kasasa. The followings are set net that caught whale.

①, Katura-se; ②, Kosaki-uto-shirikadokawara (Macami); ③, Kosaki-ebisugaura; ④, Kozeishi.

図2. 笠沙捕鯨が行われた当時の大敷網の設置場所。①桂瀬 ②高崎大当尻角川原（前網）③高崎恵比須ヶ浦 ④小瀬石

の鼻に綱を通す（ハナトオシ）。④二艘の漁船（5間程度のダンベイ船）に丸太を渡して鯨を囲み固定する。⑤浜に搬送して引揚げ。このうちハナトオシではハナトオシドンと呼ばれる人が左手にミグイ綱（カラソと呼ばれる麻綱、太さ2－3cm長さ10尋）のついたハナトオシの竹ベラを持ち、右手に軟鉄製のメグイ包丁をもって、鯨の鼻の方へ尾のほうを向いてとび乗る。タッパ（胸ひれ*）やオッパ（尾ひれ*）にたたかれそうになったときに、とっさに泳いで逃げるため、それにはタッパやオッパが良く見える後ろ向きが良い。メグイ包丁を鯨の背でピタピタたたいて曲がりをつけ、閉じた鼻腔から鼻中隔を通し貫き、その包丁にメグイ綱をつけた竹ベラをのせて元に引き抜くと、一瞬にして鯨の鼻に綱が通る。』

『浜に揚げられたクジラは、赤生木（片浦の東約1km*）のタツゴエ（笠松・清水村落）からクジラキイドンの組を呼んで、料金を払って解体してもらい、漁師は解体にはあたらない。クジラキイドンは約10名のセンツであり、2時間ほどで解体した。まずエビス様へ

の儀礼がある。最初に頭領が鯨の上に乗し、左肩の皮を2尺四方ほどに剥ぎ取る。これをまた一寸角ほどの大きさに切ったものを四切れ作って鯨の上に立ち、「ヨベッサー」と唱えながら、それを四方に向かって一切れずつ投げる。この皮はあとで村落のエビス様に供えて祭りを。その後解体となるが、まずヤマオコ（薪などを担ぐ木の棒で両端の尖ったもので長さ約1.5m*）で心臓を一気に刺す。このときはかなりの出血があり、鯨は大暴れする。肉切りはクジラキイホウチョウ（鯨切包丁*）で二尺四方に皮（カワミ）を剥ぎ切り、肉（アカミ）を切る作業を繰り返す。鯨捕りを手伝った人々には、網子はもちろん、その他のものでも役目に応じてそれぞれ小肉や皮が分配された。ムネの肉が最も上等で、一尺四寸ほど最初にとって船頭がもらった。オバやタッパは網主のものとなり、分配した残りは川辺、加世田、鹿児島などの鮮魚商に売られる。血液は清潔で新しいコエタン

*：著者注釈、以下同様

Table 1. Records of whaling at Kasasa

表1 笠沙捕鯨の記録

Year	Number of catch	Weight of catch (kan)	Weight of products (kan)	Price (yen)
1888		20,000		10,000
1889		40,000		20,000
1890		30,000		18,000
1891		20,000		10,000
1892		106,700		36,598
1893		44,800		16,790
1894		228,000		79,800
1895	12			1,250
1896	5			4,200
1897				
1898			15,000	11,250
1899			20,000	16,000
1900			15,000	13,500
1901			10,000	8,000
1902			10,000	5,000
1903			8,900	4,450
1904			10,000	8,000
1905				
1905				
1906	5			6,275
1907	5			1,500
1908	4		1,030	649
1909	1		250	150
1910	1			180
1911	5			750
1912	1			30
1912	5			1,800
1913	12		1,600	960
1914			3,600	2,160

ゴに受け取って持ち帰り肥料にした。このとき切り身をとってタンゴの底に隠して持ち帰り、家で取り出して食べた。骨は骨粉にし、背骨は蘭の鉢にして水をさすとよかった。油は燃料として使用する。』

現地での聞き取り調査によると、定置網の網型が落し網に変わったのは昭和10年頃であり、それ以前の定置網は大敷網だった。網は2種類あり、晩秋から初夏にかけては大型の大敷網を、それ以外の期間は小網を使った。魚群が入網するとヤマミが網小屋に知らせ、網子たちが漕ぎ出した5艘の小舟（ダンベ、長さ約7.5m）が端口に並んで網を持ち上げて漁獲した。クジラは寒の内に入網したが、通常の網起しと同様に魚捕に向かって

網を絞ってゆくが、完全に絞りきらない時点で敷網（麻網、一尺目合、20間×20間）を入れてクジラを二隻の小舟（ダンベ）で挟むようにして敷網ごと持ち上げた。その後、頭部を持ち上げてハナ（潮吹き穴*）に網を通してダンベに差し渡した杉丸太（持双竹）^{もっそうたけ}に結びつけた。クジラは頭部を持ち上げるとおとなしくなった。持双竹をダンベに固定して、そのまま片浦まで移送した。解体は浜辺で行い、赤生木（片浦の東約1km*）に住むクジラの解体を専門とする人たち（クジラキイ）を呼んで彼らが行った。切り始めには頭領がクジラの上に立って心臓近くの皮を一寸角に切って、「海の神サー」と言って海に向かって一切れ、「山の神サー」と言って山に向かっ

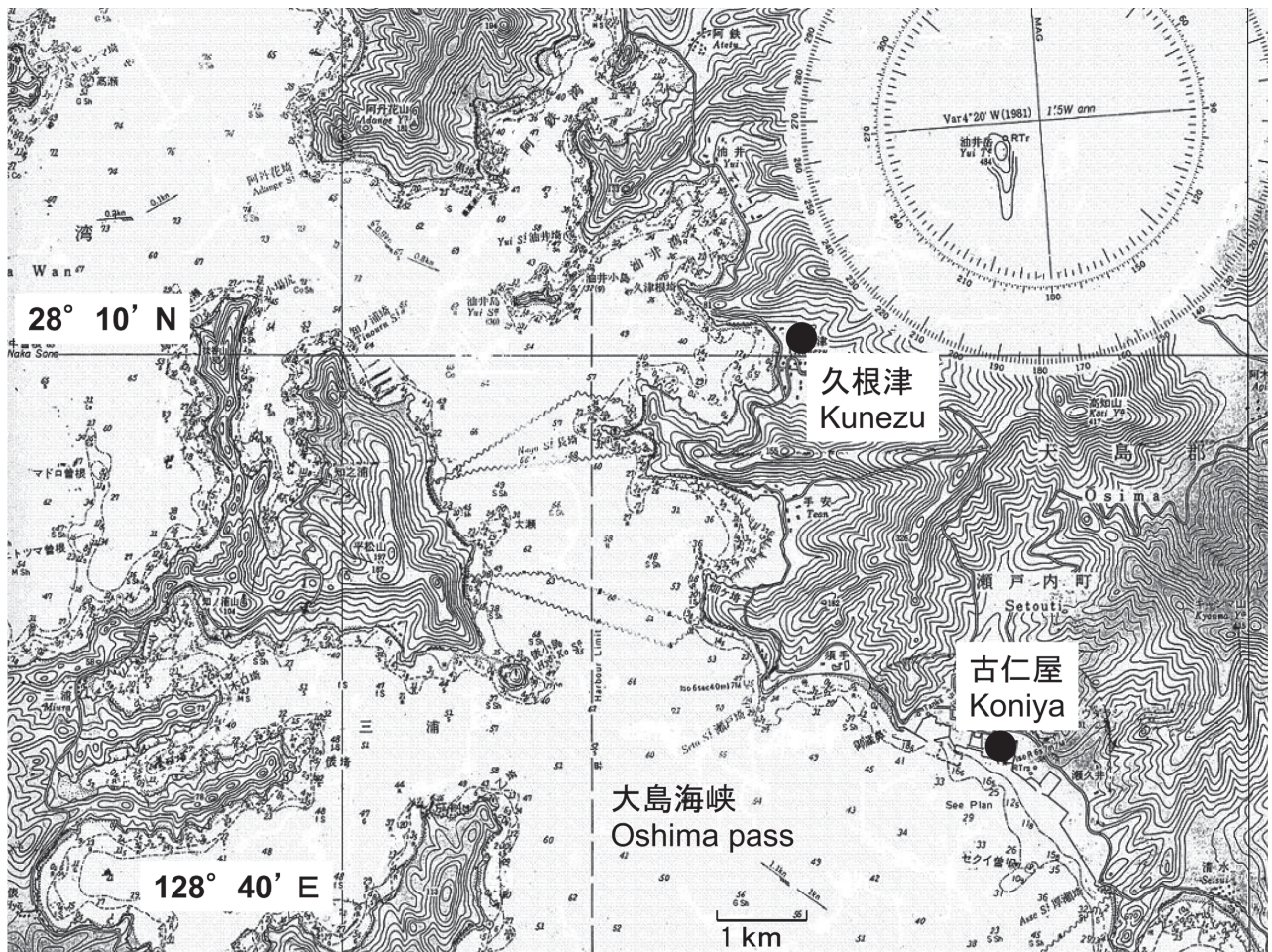


Fig.3, Location of the Kunezu whaling station.
図3. 久根津の位置

て一切れ投げた。これは、山の神と海の神への捧げものだといわれた。切り分けた肉と皮は網元と網子で分け、集落の人にも配分した。『寺床重則氏(大正5年生まれ)談』

また、片浦地区と隣接する小湊地区の寺院で鯨供養について調査したが、そのような事例はなかった。

久根津は奄美大島南西部の大島海峡に面した小集落である(Fig.3)。ここでは1912年(大正1年)から1923年(大正12年)まで大型鯨類の捕獲・解体が組織的に行われた。その後は、1934年、1957年、1958年、1961年に小規模な捕鯨が散発的に行われたが、これ以後は行われていない。これらを奄美捕鯨と呼ぶ。奄美大島水産業沿革史⁴⁾によると久根津で行われた大正時代の捕鯨について次のように記している。『日本東洋捕鯨株式会社は大正元年11月根拠地を東方村(古仁屋町)久根津に設け鯨鯨に従事し良成績を挙げ得たが之また戦争の為引揚げ、処理工場も戦災をこうむって跡を止めていない。』また、同書によれば、『交通、通信の便を考慮して久根津を根拠地に決定し、同地海辺にぼう大なる鯨体処理工場(敷坪数反余;約

3000 m²*)と鯨体引揚げ棧橋(幅25尺余;約7.5 m*)を建築して、長崎、五島、山口方面より集められた70余人の解体夫が解体処理に従事した。』とある。さらに、『鯨骨、鯨歯、鯨しゆ細工等を売る店舗(土産物店)、食堂、料理屋等所せまい程当部落に密集し、部落始まって以来の盛観だった。それと共に鯨の臓物等を用いてする肥料工場も他の商人によって建設され一変した景況に活気を呈したが、南氷洋捕鯨への轉向と戦争の為現在は当時のおもかげをしのぶもない』。豊田⁵⁾は当時の久根津の状況を次のように記している。『捕鯨会社の工場は蒸気機関を備え、巻揚機で鯨を引揚げ解体処理し、鯨肉の冷凍、皮の塩加工、鯨油取り施設を備えると共に肥料加工場も併設して当時としては最新の設備だったといえる』。これらのことから大正期の奄美捕鯨では、鯨体が食糧から肥料まで完全利用されたことが明らかである。鯨歯、鯨鬚細工等を売る店舗があったという記述から、捕獲されたクジラの種類は歯クジラのマッコウクジラ(*Physeter macrocephalus*)や、ヒゲクジラ類と考えられる。

Table 2. The composition of whales landed on the Kunezu whaling station for 5 seasons (1914, 1919, 1921, 1922 and 1934).

表2 奄美捕鯨の捕獲記録 (1914年, 1919年, 1921年, 1922年, 1934年)

Year	Species						Total
	Hunpbck whale	Fin whale	Blue whale	Right whale	Bryde whale	Sperm whale	
1914	88	4	3				93
1919	28	1		1		1	31
1921	8	1			1		10
1922	3						3
1934	4	1	2			9	16
Total	131	7	5	1	1	10	155

These data were cited from Miyazaki and Nakayama (1989).

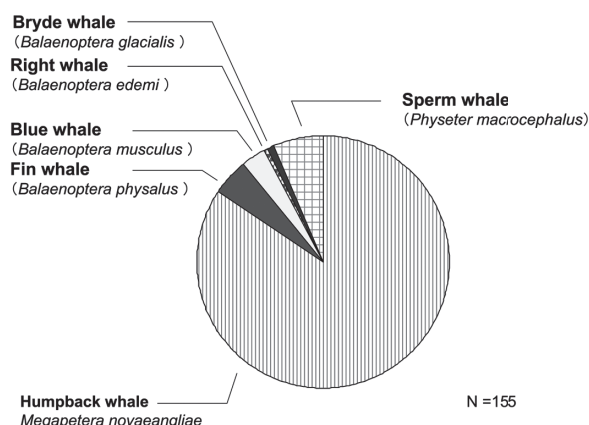


Fig.4. Catch composition of whales landed at the Kunezu whaling station for 5 whaling years, (1914, 1919, 1921, 1922 and 1934). These data were cited and partly changed from Miyazaki and Nakayama (1989).

図4 奄美捕鯨で捕獲された鯨の種組成 (1914年, 1919年, 1921年, 1922年, 1934年) Miyazaki and Nakayama (1989) を一部改変。

奄美捕鯨の記録が残されている5年分 (1914年, 1919年, 1921年, 1922年, 1934年) を解析した Miyazaki and Nakayama⁶⁾ によると, 捕獲された種類と頭数はザトウクジラ (*M. novaeangliae*) 131頭, ナガスクジラ (*Balaenoptera physalus*) 7頭, シロナガスクジラ (*Balaenoptera musculus*) 5頭, セミクジラ (*Balaenoptera edemi*) 1頭, ニタリクジラ (*Balaenoptera glacialis*) 1頭, マッコウクジラ 10頭である。捕獲された種類を Fig 4 に示しているが, 捕獲のほとんどがザトウクジラであり, ナガスクジラ, シロナガスクジラ, セミクジラ, ニタリクジラは少数である。5年分の鯨種別捕獲頭数を整理して Table 2 に掲げる。これから年を経るごとに捕獲の主体であるザトウクジラの捕獲頭数が急速に減少していること及び, マッコウクジラが増加していることが明らかである。クジラの捕獲は捕鯨砲を装備したキャッチャーボート (約 100 トン) で行われ, 砲手はノルウェー人である。⁷⁾ 操業は根拠地の久根津を夜明け前に出港し, 奄美大島の沿岸水域でクジラを探索, 捕獲して日没前に帰

港していた。⁸⁾ 東洋捕鯨株式会社による捕鯨は 1923 年 (大正 12 年) までの 12 年間で終了するが, 1934 年 (昭和 9 年), 1957 - 58 年 (昭和 32 - 33 年), 1962 年 (昭和 37 年) にも捕鯨は小規模で散発的に行われた。

戦後の奄美大島での捕鯨再開の端緒は, 奄美漁業誌⁹⁾ によると以下のとおりである。『大島漁連会長大野重隆氏は復帰前に佐賀県から技術員を招聘, 捕鯨事業を始めようと許可申請を行っていたが, 復帰によって氏の企画は中断され, 改めて農林省に対して昨年 11 月 20 日申請, このほど許可されたもの。大野氏の計画によると, 名瀬市大熊を漁業基地として, 長崎県松浦郡中島為一氏の小型捕鯨船 2 隻で大島周辺のミンク鯨を捕り, 大熊に鯨解体処理工場を建造, 搾油施設と倉庫を完備して鯨の加工製品を島内需要と内地への移出に振り向けることになっている。(昭和 30 年 2 月 5 日付南日本新聞)』このような経緯を経て, 捕鯨は久根津を基地として行われた。1957 - 58 年 (昭和 32 - 33 年) には北洋水産株式会社の第十八竜丸, 丸良丸 (29 トン) が奄美大島と徳之島の間水域でミンククジラ (30 尺, 6000 斤) 10 頭を捕獲し, 久根津の鯨体処理場で処理した。鯨肉は氷漬けないしは塩漬けで北九州へ送られ, 一部は島内でも消費されている。¹⁰⁾ 1958 年 (昭和 33 年) には瀬戸内漁協が近海小型捕鯨の認可を受けて, 北洋漁業の銀星丸 (29 トン) をチャーターしてミンククジラ 2 頭, シャチ 3 頭を捕獲した。¹¹⁾ 1961 年 (昭和 36 年) 12 月に瀬戸内町漁協に農林省から捕鯨事業の認可があり, ¹²⁾ 宮城県丸浄捕鯨会社のキャッチャーボート 2 隻をチャーターして操業し, 1962 年 (昭和 37 年) 3 月にシャチ (10 m, 6 トン) を捕獲した。¹³⁾ 同 4 月に瀬戸内町漁協総会は捕鯨事業の継続を決議したが, これ以後は瀬戸内町漁協の取り組み記録や, この漁業にとりくむ人はいない。⁹⁾

昭和 33 年 12 月の古仁屋大火で役場や漁協も焼失し, 捕鯨に関する記録は残っていなかった。久根津での聞き取り調査によると, 昭和 33 年に鮎川を母港とする捕鯨船 (第八龍丸) が 1 月から 2 月にかけて約 2 ヶ月操業し

た。捕獲したクジラは捕鯨船が曳鯨して、海岸に設けた引揚げ棧橋で解体した。引揚げ棧橋は海中に松材を杭として打ち込み、その上に製材した松板を張ったもので、幅が8間(12m*)くらいあった。クジラは尾部に綱をかけて棧橋に引き上げ、皮に切れ目を入れて鉤付きの綱を海岸の松の木(幹周り約1.5m)にかけた滑車を介して、カグラ(轆轤*)で綱を巻きながら皮をはいで解体した。このとき、クジラの重みで松が株ごと抜けたこともあった。親方は五島の人で、解体夫も五島の出身で5, 6人いて、包丁は彼らが扱った。解体の最初に行う儀礼は特になかった。久根津集落の人たちの大半が作業に従事して収入を得た。この時期は黒糖作りの時期でもあったが、人手がなくて製糖作業ができなかった。解体作業に出るときには弁当を持たないで行ったが、鯨肉だけで満腹になった。皮と肉は運搬船で冷凍して本土に輸送した。解体後に残った骨や内臓は集落の分け前となって、骨から削いだ肉や内臓は、茹でて古仁屋の町で売ったし、外部からも買いに来ていた。内臓のうち肺は食べられないので小舟に載せて沖まで捨てにいった。肉は塩漬けで保存して1年くらい食べた。また、鯨肉は滋養があり、戦地から戻って寝たきりだった集落内の人が、鯨肉を食べて歩けるまで回復した。解体時に切断した頭部は沈んでしまふと思って捨てたが、浮いて海岸に漂着したので、捕鯨船が沖合に運んで捨てていた。種類はザトウクジラが主体でマッコウクジラもあった。1日に2頭を捕って来ても珍しくなく、一冬に約30頭捕った。昭和33年の1年だけで撤退し、解体場の跡地は奄美養魚の事務所になっている。「岩井亀義氏(昭和2年生まれ)談」

考 察

笠沙の大敷網ではクジラを獲ることがあったが、それらは崎の山半島の先端から野間半島北側までの間に設置されたものに限られ、野間池の七つ瀬網漁場図(明治20年)にはザトウクジラが描かれている。これらの大敷網は遠浅の吹上浜から離れて水深が深く、クジラの回遊経路に沿っていたと考えられる。しかし、笠沙の大敷網は「単に鯨ノミヲ捕獲スル目的ヲ以テ設置シタルモノニアラス」¹⁾で一貫しており、クジラが片浦の産物として登場するのは明治中期以降である。この間に片浦へ外部から何らかの形で捕鯨技術が伝播したものと考えられる。五島編年史¹⁴⁾によれば1872年(明治4年)に網取式捕鯨の基地である長崎県五島の有川から鯨組を片浦へ派遣したとある。「島津家、鯨組ヲ開キ五島家ニ来談アリ。乃チ五島家ハ有川ニ命ジテ漁師ヲ送ル。大塚八郎ト水主其他四百人ト共ニ鯨船六艘、諸道具一切ヲ揃ヘテ二月薩

州加世田掛ノ内、片浦ノ組場所桂瀬ニ出漁シ、五月帰村ス」とある。桂瀬は片浦の崎の山半島の先端に位置する定置網の漁場であり、加世田郷漁場図では「鯨網網代深サ十七八尋(10.5 - 12m*) 三月、六月迄シキ入シビ其外鯨マテ得漁」¹⁾と記されている。また、「鯨網網代デモ鯨ヲ取得」¹⁾とあり、笠沙では鯨組の派遣以前の江戸時代からクジラは定置網で捕獲されていた。

明治初期の長崎県五島の有川から鯨組派遣の記述にある400人という数は、直接捕鯨に従事する者だけでなく、解体や油を煮取るなどの納屋場作業の合計人数である。派遣を要請した島津家の目的は、定期的な来遊と漁獲があるクジラに注目して鯨組のような利益を目指したと考えられるが、片浦にはこれだけの人数が作業したという記録や痕跡も見当たらない。また、当時の片浦には400人規模の鯨組と納屋場を運営するだけの資本と統率力を持ったものはいない。これらのことから、有川から比較的少人数が片浦に来たと考えるのが妥当である。一方、片浦では明治中期からクジラは主要な漁獲となっていることから、鯨組があった有川あるいは玄界灘沿岸から何らかの捕鯨技術がもたらされ、漁獲効率が向上したとも考えられる。宮本¹⁵⁾によると、大敷網は天保年間(1830 - 1843年)に鹿児島に伝播したとされ、笠沙町郷土誌¹⁶⁾によると、文化14年(1817年)に肥前から導入されたとする。網の構造は沖の側に袖網を、地の側に逆網(垣網)を配置して、身網の口には引揚網がついている。大敷網の漁獲物はクロマグロ、ブリ、イワシなどだが、クジラを目的にマグロ大敷の沖側にクジラ大敷を設置した事例¹⁵⁾(佐賀県神集島)もある。一方、片浦の定置網ではマグロやブリが主目的であり、クジラの捕獲は偶発的であった¹⁾。

有川の鯨組を地元漁民は快く思っていなかったことを伺わせる資料がある。『過ル明治四年度当郷大崎浦平民小田十次郎他四・五名、五島漁民雇入、洋中漁術ノ名義ニテ鯨口口設ケ候ヘトモ洋中漁術トハ全ク名ノミニシテ、私共ノ漁場近海に船ヲ繫キ鯨鯨待設、私共漁場魚道ニ鯨鯨遊来候ハ、追船ヲ出シ、金鼓ヲ鳴シ、追散候ノミナラズ、適々入網セル鯨鯨モソレカ為メ驚テ破網シ取逃サルヲ得ス』これは片浦の漁民12名から鹿児島県に出された、「鯨鯨場之儀ニ付款願」¹⁷⁾の一部である。この記述から有川の漁民は金属音を出しながら威嚇して、船でクジラを自分の網に追い込んでいることが明らかである。これは網取り式捕鯨の技術で非常に効率的であり、クジラが入網することを待つだけの片浦の漁民との間で紛糾したといえる。

捕鯨技術に関しては、笠沙捕鯨と網取り式捕鯨では共通点と相違点がある。笠沙捕鯨では大敷網に入網した

クジラを捕獲する場合、敷網を入れてクジラを抱くようにして持ち上げて潮吹き穴に綱を通して船につなぎとめる。潮吹き穴に綱を通すことは共通しているが、笠沙の方法は綱をクジラに巻きつけて船につなぎとめる網取り式とは異なる。ここで使用する敷網は、振網漁業での中敷網と同じ技術であり¹⁸⁾、振網漁業の原型である葛網は薩摩では享保年間(1716 - 1735)には存在していた¹⁹⁾ことから、この技術がクジラを捕獲する敷網に転用されたと考えてよい。大敷網に入網したクジラを捕獲する場合、潮吹き穴に綱を通すことは網取り式捕鯨と同様であり、ここには網取り式の捕鯨技術が導入されたと考えてよい。しかし、笠沙捕鯨では、クジラに止めを刺さないことや、敷網でクジラを保持することは網取り式捕鯨との大きな相違点である。これはクジラを網で完全に包囲して自由を奪っているため運搬には支障がないこと、あるいは漁業者が大型哺乳類のクジラの殺生を忌避して、解体処理を「クジラキイ」にやらせたのかもしれない。上述の漁獲技術に加えて笠沙捕鯨では塩鯨に加工して肥前、肥後へ出荷していることを総合して考えると、有川から来た鯨組の集団は、定置網へクジラを駆集して効率的に捕獲するための技術及び、塩鯨の製造方法や鯨製品の販路などを伝播したと考えられる。有川の鯨組が片浦の大敷網へ捕鯨に関する何らかの技術をもたらし、それが明治中期以降にクジラを片浦の特産物となる基礎となったと考えられる。しかし、笠沙捕鯢が大正初期で終息しているのは、明治30年代から急速に拡大した日本近海での近代捕鯢の影響を受けたものと考えられる。

クジラの解体儀礼についてはほとんど報告がないが、対馬(現対馬市上県町伊奈)では、八寸角に切って「何処ノキツシ寺のキツシ坊主ニタテマツリマス」と唱えて、ここでは解体儀礼に寺の関与が伺える。²⁰⁾ 江戸時代の長崎県生月島での鯨取りの様子を描いた勇魚取繪詞²¹⁾には「鯨ヲ解捌時ニ背ノ皮ヲ五寸方切テ漁神ニ備フナリ是ヲカケメトイフ」や「鯨ヲ解捌時ニ背ノ皮一尺方ニツ切ヲ羽指共ヘ遣スヲ切祭トイフ」の記述があり、背中の皮を切って漁の神へ供える解体儀礼や、羽指たちに背中の皮を振舞ったことがわかる。片浦の儀礼はこれらとの共通性が強く、有川の鯨組が片浦にもたらしたと推察される。赤生木にクジラを解体する集団が存在したことは、有川の鯨組の構成員またはその技術を継承した集団がここに定住した可能性が高い。鯨組では漁期の終了時には寺院で鯢供養²¹⁾を行い、ここには仏教の影響がある。これに対して片浦の儀礼は「エビスサー(恵比寿様*)」を唱える。これは他の漁撈儀礼と変わりなく、対馬より古い形態だと考えられる。海の習俗の中で山の神を祀る

ことは多く見られ、フナオロシ(船下ろし*)の際、新造船を陸の方へ三度引き戻すヤマンカンモロシ(山の神戻し*)や、片浦では漁師が野間岳に登って大漁を祈願することはその一例である。南九州では山鯢の解体儀礼は少ないが、大隈半島の事例はイノシシを解体する前に包丁を当て祝詞を唱える。これはイノシシを殺した罪を消す祈りで、人に聞こえないように唱えるもので、罪を他人に転嫁する行事である。²²⁾ 片浦のクジラの解体儀礼は海と山に共通する儀礼であるが、山鯢との関連はなく、鯢組の影響が伺える笠沙独自の漁撈儀礼と考えられる。一方、大敷網が笠沙に導入されてから、少なくとも量のクジラが捕獲されているが、長門や小川島で見られる鯢供養²¹⁾は行われていない。このことは、笠沙捕鯢が、鯢組のような大規模な組織で行われなかったことや、廃仏運動の影響を受けて仏教が鯢供養に関わる余力を持たなかったと考えられる。

日本の古式捕鯢である網取式捕鯢は、沿岸を冬に南下して春には北上するクジラを対象に、長崎県壱岐、佐賀県小川島、長崎県五島、平戸、高知県浮津、和歌山県串本、太地などで行われてきた。網取式捕鯢は1674年(延宝5年)から始まり、鯢組による組織的な捕鯢が約300年継続した。²³⁾ しかし、明治時代には日本近海での外国捕鯢船による濫獲で、網取式捕鯢による捕鯢は大きく衰退していた。汽船に捕鯢砲を装備して鉋を発射するノルウェー式捕鯢の成功(1877年)からこの捕鯢方法は世界に広まり、1891年(明治24年)ロシアは、ウラジオストクに露国太平洋捕鯢会社を設立して、韓国東北岸でノルウェー式捕鯢を行い、鯢肉、鯢油を大量に長崎へ輸出した。これに対して岡十郎は、1898年(明治32年)に山口県仙崎に日本遠洋捕鯢株式会社を創設してノルウェー式捕鯢を開始した。²³⁾ これが我国の近代捕鯢の端緒である。1908年(明治41年)には長崎捕鯢合資会社ははじめ多数の捕鯢会社が誕生し、漁場は日本海から太平洋岸にも広がった。資源の保護と経営の合理化の見地から岡十郎は、各社の合同を提唱し、1909年(明治42年)東洋捕鯢株式会社が設立された。この間に捕鯢漁場は金華山、鮎川、銚子、紀州大島、土佐清水など太平洋沿岸部に拡大した。²³⁾

奄美大島近海はザトウクジラなどの鯢類の越冬水域であり、冬季に沿岸で毎年見られるその姿は、顕著であったと考えられ、奄美大島の民俗伝承として残されている。名瀬市小湊、大川川口には「鯢松」という松がある。この松は太平洋の風をまともに受けながら、岩石にしがみついている。松の名のおこりは、近くに鯢が集合したからだという。²⁴⁾ 宇検村の奄美嶽のふもと、湯湾に注ぐ清流のあたりの静かな山陰に「くじらごう」という地名

がある。ここには昔から「毎年正月になると、鯨が数頭連れ立って、奄美嶽を望む近くの海域に、年頭の挨拶に来た」という伝承があり、地域の人たちは「鯨の嶽参り」と語り伝えてきた。²⁴⁾

東洋捕鯨は奄美大島近海がクジラ類の越冬水域であることに着目して、捕鯨の冬季事業場の一つとして進出したと考えられる。沿岸捕鯨は陸上に根拠地を選んで、鯨体の解剖から処理に至るまでの一切の設備を備え、捕鯨船一隻乃至数隻を以って操業させるのである。従って漁場に近いか、水深深く波静かな良湾であること、水の豊富なことの三条件を備えた土地でなければならない。²⁵⁾ 奄美は大島海峡に面した波静かな内湾で、油井岳を水源として水も豊富であり、捕鯨根拠地としての条件を満たしている。久根津捕鯨で使用された捕鯨船レックス丸はノルウェーから輸入した捕鯨船で、110～135トン、40馬力である。²⁶⁾ 当時、日本の捕鯨技術は船体、装備全般及び、砲手をノルウェーに依存していた。

Miyazaki and Nakayama⁶⁾ から捕獲位置の沿岸からの距離を算出して整理したものがFig.5である。奄美捕鯨の主体をなすザトウクジラの捕獲位置は、沿岸に非常に近く2マイル以内が約37%で最も多く、6マイル以内では約80%を占め、本種が沿岸域を遊泳していたことを示す。外洋性のマッコウクジラを除いた全ての鯨種の捕獲

位置は、沿岸から10マイル以内に集中している。このことは冬季の奄美大島沿岸には、ザトウクジラ等が高密度で分布し、好漁場だったことを示す。また、漁場が根拠地に近いことは、皮下脂肪が断熱材となって体温が上昇する捕獲後のクジラを短時間で基地まで曳鯨でき、操業効率の増加に寄与したと考えられる。

近海捕鯨の対象はシロナガスクジラ、ナガスクジラ、ザトウクジラ、イワシクジラ及びマッコウクジラであり、いずれも冬季は南西部の暖海にいて、日本沿岸を北上してオホーツク海から千島に達し、再び沿岸を南下する季節的な回遊をしている。²⁶⁾ シロナガスクジラ、ナガスクジラ、ザトウクジラ、及びマッコウクジラの捕獲記録²⁶⁾ と奄美捕鯨での記録を比較したものが、Table 3である。捕獲の主体はナガスクジラとマッコウクジラである。奄美捕鯨(1912年－1923年)で捕獲したザトウクジラは、年度ごとの捕獲頭数では約60%を占めているが後半には急速に減少している。奄美捕鯨の時期は、日本にノルウェー式捕鯨が急速に普及して、夏季の索餌場であるオホーツク海や北太平洋での捕獲数が増加した時期ともほぼ一致する。²⁶⁾ 漁場が拡大して急速にクジラの捕獲数が増加して、越冬のために奄美海域に来遊するクジラ類が減少し、操業効率が低下したため東洋捕鯨は12年という短期間で撤退したものと考えられる。

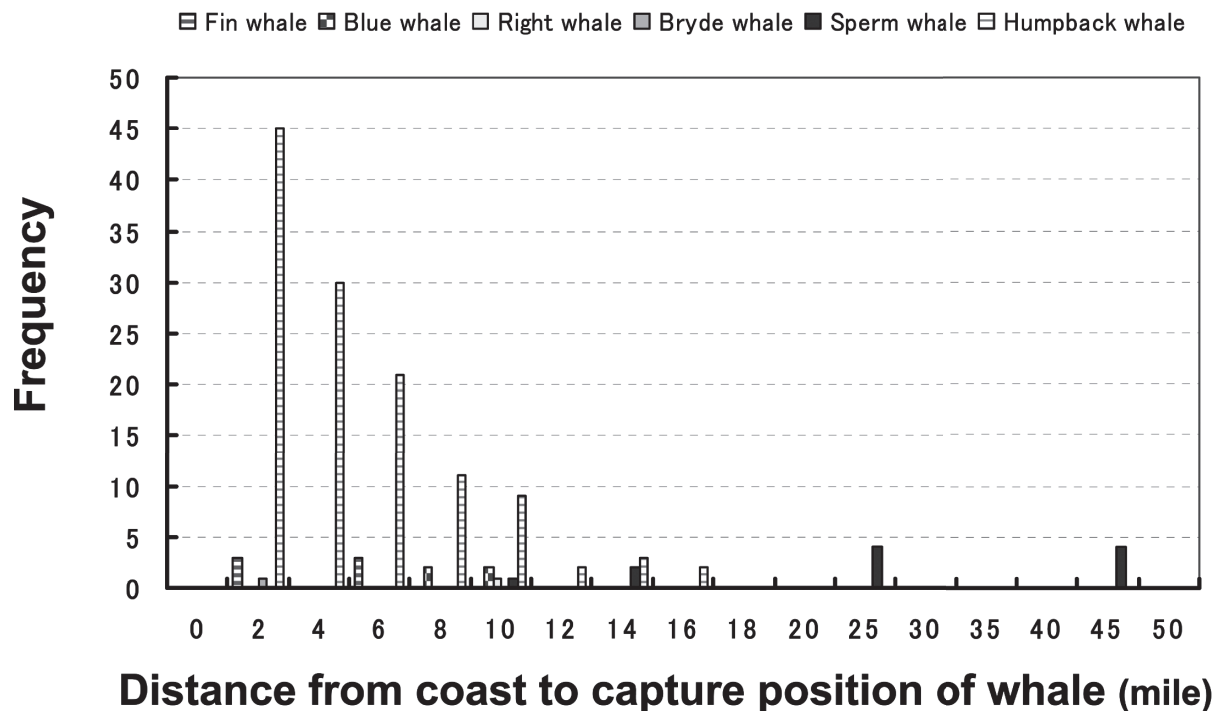


Fig.5. Frequency distribution of the distance from coast to the position of whaling ground, where whales were landed on the Kunezu whaling station in 5 seasons. (1914, 1919, 1921, 1922 and 1934). These data were cited and partly changed from Miyazaki and Nakayama (1989).

図 5. 久根津捕鯨 5 年間 (1914 年, 1919 年, 1921 年, 1922 年 1934 年) での捕獲位置の沿岸からの距離の頻度分布. Miyazaki. and Nakayama (1989) を一部改変.

戦後、奄美捕鯨は、散発的で継続することなく消滅している。この捕鯨はミンククジラを対象とした小型捕鯨の許可で、ミンククジラ、ゴンドウクジラ、ツチクジラ、シャチなどを捕獲対象とする30トン以下の捕鯨船による捕鯨業であり、1947年から農林水産大臣の許可制となっている。²⁷⁾しかし、奄美捕鯨では許可以外の鯨種を捕獲しているのでないかと問題になったこともある。¹²⁾現地の聞き取り結果から、捕獲した鯨種はザトウクジラが主体で、頭部は切断して沖合に投棄したことは、このような事情を示していると推察される。小型捕鯨という規制があつて、戦後の奄美捕鯨は継続しなかったと考えられる。

笠沙捕鯨は伝統的な定置網漁業を基盤に網取式捕鯨の技術を加えて発展したと考えられ、独自の漁撈文化を形成していた。一方、奄美捕鯨は技術的に確立された近代捕鯨を企画的に行つたものであり、地域文化の形成には至らなかった。笠沙捕鯨並びに奄美捕鯨では、海洋生態系の構成要素の一つであるクジラが季節的に来遊することに着目し、それぞれの時代の最先端の技術で捕獲して

いたが、漁業自体が小規模なので、漁獲努力量は自然条件に影響されていた。漁獲したクジラは食糧、肥料や工芸品と様々な形で利用し、地元住民へ食糧として分配するほか、雇用の機会も創出していた。ここには漁業本来の姿があり、海洋生物資源の持続的利用の原点ともいえる。

謝 辞

本研究の遂行にあたり資料並びに情報を提供いただきました、瀬戸内漁業協同組合組合長 叶 良久氏、瀬戸内町役場 田中勝弘氏、七つ瀬網元 山元恵三郎氏、寺床重則氏、岩井亀義氏、鶴添泰蔵氏に厚くお礼申し上げます。

文 献

- 1) 笠沙町 (1991). その他の漁業, 「笠沙町郷土誌」上 (笠沙町郷土誌編さん委員会編), ぎょうせい, 東京, pp. 500 - 504.
- 2) 笠沙町 (1991). 漁業の推移, 「笠沙町郷土誌」下, (笠沙町郷土誌編さん委員会編), ぎょうせい, 東京, pp. 438 - 462.

Table 3. Records of whales landed on the coastal whaling in Japan from 1911 to 1934.

表3 近海捕鯨の年度別捕獲頭数 (1911年 - 1934年)

Year	Blue whale		Fin whale		Humpback whale		Sperm whale	
	Total	Amami	Total	Amami	Total	Amami	Total	Amami
1911	239		723		53		162	
1912	235		567		52		107	
1913	28		661		125		77	
1914	122	3	875	4	145	88	301	
1915	57		565	1	102		252	
1916	70		482	1	82		389	
1917	53		430		24		39	
1918	25		422		14		576	
1919	50		262		50	28	461	1
1920	35		251		52		245	
1921	53		242		41	8	301	
1922	36		197		22	3	565	
1923	32		258		17		364	
1924	32		211		105		336	
1925	28		237		103		479	
1926	32		215		58		624	
1927	9		149		29		449	
1928	17		149		31		617	
1929	13		203		12		606	
1930	48		142		12		751	
1931	17		171		30		359	
1932	17		125		41		567	
1933	6		124		58		617	
1934	24	2	178	1	42	4	791	9

- 3) 笠沙町 (1991). 捕鯨, 「笠沙町郷土誌」下, (笠沙町郷土誌編さん委員会編), ぎょうせい, 東京, pp. 719 - 722.
- 4) 琉球農林省大島支部水産課 (1951). 捕鯨漁業, 「奄美大島水産業沿革史」(琉球農林省大島支部水産課編), 奄美文明社, 名瀬, pp. 5 - 7.
- 5) 豊田孝久 (1999). 久根津集落の経緯, 「関西瀬戸内会創立50周年記念誌」, ケイシマ工芸, 尼崎市, pp. 52.
- 6) Miyazaki N. and K. Nakayama (1989). Records of Cetaceans in the Waters of Amami Islands. *Mem. Natn. Sci. Mus.*, **22**, 235-249.
- 7) 慶 正信 (1988). 捕鯨会社のあったころ, 「わきゃあ島久根津」(豊シズエ編), pp. 61.
- 8) 栄 福明 (1988). 捕鯨船に乗った思い出, 「わきゃあ島久根津」(豊シズエ編), pp. 61 - 62.
- 9) 吉野清勇, 岩井重彦 (2002). 捕鯨業, 「奄美漁業誌」.(奄美群島水産振興協議会編). 斯文堂, 鹿児島, pp. 250-255.
- 10) 南海日日新聞社昭和32年3月19日(1999). 港古仁屋は“鯨ブーム”, 「瀬戸内町誌歴史編資料集1」.(瀬戸内町誌編纂委員会編). 奄美新生社印刷, 名瀬, pp. 95.
- 11) 南海日日新聞社昭和33年3月8日(1999). 捕鯨へ明るい夢, 「瀬戸内町誌歴史編資料集1」.(瀬戸内町誌編纂委員会編). 奄美新生社印刷, 名瀬, pp. 100.
- 12) 南海日日新聞社昭和36年12月17日(1999). 捕鯨事業認可さる, 「瀬戸内町誌歴史編資料集1」.(瀬戸内町誌編纂委員会編). 奄美新生社印刷, 名瀬, pp. 110.
- 13) 南海日日新聞社昭和37年3月1日(1999). 重さ六トンのシャチ, 「瀬戸内町誌歴史編資料集1」.(瀬戸内町誌編纂委員会編). 奄美新生社印刷, 名瀬, pp. 112.
- 14) 中島 功 (1973). 鯨猟師ヲ送ル, 「五島編年史」, 下巻, 国書刊行会, 東京, pp. 1093.
- 15) 宮本秀明 (1952). 臺網と大敷網, 定置網漁業論, 河出書房, 東京, pp. 140 - 160.
- 16) 笠沙町 (1991). 漁業の変遷, 「笠沙町郷土誌」下, (笠沙町郷土誌編さん委員会編), ぎょうせい, 東京, pp. 723 - 725.
- 17) 笠沙町 (1991). 川辺郡南方郷鹿籠村平民本多喜三太他一名鯨猟場之儀ニ付歟願, 「郷土誌編纂資料第3集」, (笠沙町郷土誌編さん委員会編), ぎょうせい, 東京, pp. 1 - 2.
- 18) 日本鯨類研究所/日本捕鯨協会 (2004). 「勇魚取繪詞」, 日本鯨類研究所/日本捕鯨協会, 東京, pp. 33 - 41.
- 19) 不破 茂, 石崎宗周, 丸儀雅孝 (1999). 鹿児島県山川町の振網漁業について, 鹿大水紀要, **48**, 25 - 32.
- 20) 日本学士院 (編) (1983). 明治前日本漁業技術史, 復刻版, pp. 199 - 206, 岩崎美術社, 東京.
- 21) 宮本常一 (2007). 対馬調査ノート, 「農村探訪録」, 周防大島文化交流センター, pp. 117.
- 22) 那珂野久廣 (1977). 山樵・狩獵, 「大隈半島東部有形民俗資料調査報告書」, 鹿児島県明治百年記念館建設調査室, こだま印刷, 鹿児島, pp. 66 - 67.
- 23) 岡本信夫 (1965). 近代捕鯨業の生成, 「近代漁業発達史」, 水産社, 東京, pp. 140 - 160.
- 24) 日高 旺 (2005). 鯨の寺社参り, 嶽参り, 「黒潮の文化誌」, 南方新社, 鹿児島, pp. 122 - 124.
- 25) 在原千秋 (1954). 沿岸捕鯨, 「水産講座漁業篇捕鯨業」, 大日本水産会出版部, 東京, pp. 115 - 116.
- 26) 前田敬治郎, 寺岡義郎 (1952). 日本の近海捕鯨, 「捕鯨」, いさな書房, 東京, pp. 96 - 117.
- 27) 斉藤市郎 (1962). 捕鯨業, 「遠洋漁業」. 恒星社厚生閣, 東京, pp. 269-297.

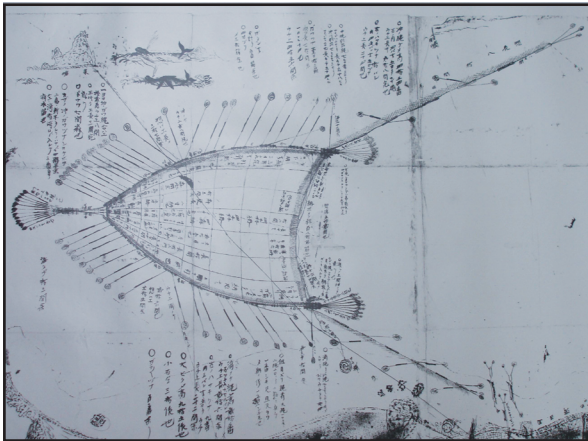


Photo.1. The net plan of Nanatsuse set net fishing ground in Nomaike drawn in 1888.

写真1 野間池七つ瀬定置網漁場図(明治20年)。

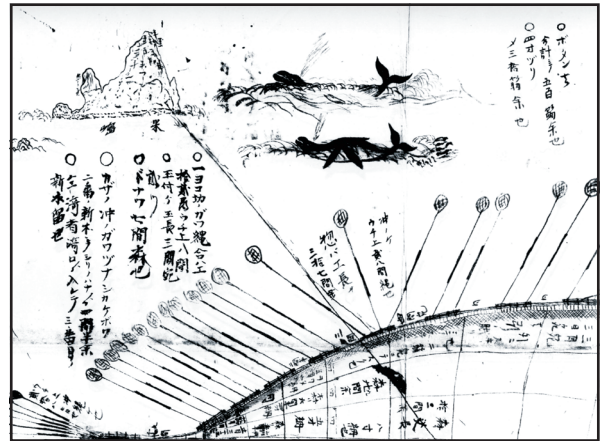


Photo.2. The whale in the partially enlarged from the net plan of Nanatsuse set net fishing ground in Nomaike drawn in 1888.

写真2 野間池七つ瀬定置網漁場図(明治20年)に描かれたクジラ。



Photo.3. The view of set net in Kasasa now. Kosaki-uto-shirikadokawara (Macami) had been set at this area in the days of Kasasa whaling.

写真3 現在笠沙に設置されている定置網。この場所は笠沙捕鯨の時代は高崎大当尻角川原(前網)。



Photo.4. The view of Sakinoyama perpendicular at Kasasa.

写真4 崎の山半島の景観



Photo.5. The view of Shimizu village at Akaogi.

写真5 赤生木清水集落の景観



Photo.6. The photo of knife for dissection of whale. (Stored in Kasasaebisu museum)

写真6 クジラ解体用包丁(笠沙恵比須所蔵)



Photo.7. The view of Kunezu and Ooshima pass in Amami Island..
写真 7 久根津と大島海峡の景観



Photo.8. The trace of Kunezu whaling station, the office of tuna farming company now.
写真 8 久根津の捕鯨基地跡、現在は奄美養魚株式会社



Photo.9. The vertebra of whale at the office of Amami fish farming company.
写真 9 クジラの脊椎骨 (奄美養魚株式会社)



Photo.10. The vertebra of whale.
写真 10 クジラの脊椎骨



Photo.11. The relief of whale on the Kunezu bridge
写真 11 久根津橋のクジラのレリーフ



Photo.12. The photo of "Geiseki" (whale stone) in Amami city.
写真 12 鯨石 (奄美市)

